

鳥城の白いスワン

私は平和の中に潜っていた
毎日は当然で、泡のように消えていた
何も気に病まず、明るい生活だった

その城は今まで見た事もない 黒い色をしていた
「からす」城の別名を持つくらいだった
黒い城の下にある堀には
白いスワンが浮かんでいた

私と彼はスワンに乗った
私は初めて誰かのために弁当を作っていた
卵焼きにはグリーンピースが入っていた
彼はグリーンピースが大嫌いだった
彼はその事を口にする、卵焼きも口にした
それより酒の入れすぎだった

漆黒の城の、純白の鳥に乗った二人は
ひたすらペダルをこいでいた
これからもずっと二人でこぐつもりでいた

突然、私の中にある黒い心のせいで彼を失った

彼は最初から最後までずっと白い人だった
だから私は毎日白い色の中にいた
だんだんと白い色を見たくなくなった

私は他の色を見てみたいと思った
何度もそう思った

彼は思った「もうこれで何回目なのかな」
ついに彼は、私に戻って来て欲しいと思わなくなった

私は普段通りだった
いつものように彼のもとへ戻ろうとした
私はドアを叩いたが、彼の声はしなかった

「別にいつか」

彼がいようというまいと
この部屋はどうせ白いままなのだからと思った
私はドアを開けて部屋に入った
中は黒い色をしていた

今彼は誰かと二人で白いスワンに乗り
ペダルを一緒にこいでいる

私は今も一人で黒い城に住みながら
白い色を描こうとしている